
糞のような理想のために。

鴉野 兄貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

糞のような理想のために。

【ZPDF】

Z0255BA

【作者名】

鴉野 兄貴

【あらすじ】

今度の仕事は「糞尿収集」。

この世界では珍しい上下水道完備の「車輪の王国」では便所はあまり珍しいものでもなく……。

変態技師の熱い理想はあまりにも気高く、そして臭いものだった。世界の平和のために『夢を追う者たち』は再び立ち上がる！

(前書き)

注意！！糞尿を表す言葉が80以上登場します。
今回の依頼人の変態度は極めて高いので注意願います。
そういうのがダメな人は絶対みないでください！！！

う～メシメシ～！」

そういうつて走り出す俺は何処にでもいる冒険者。
しいて違うところをいうなれば、本当は女って事くらいかな?
名前は……チーアって呼んでくれ。

腹が減つては仕事は出来ぬが、仕事がなければ腹は減つたままである。

そんなわけで、今日の狩りも不調に終わった俺は「車輪の王国」王都郊外の森の中にある冒険者の宿、

『五竜亭』に仕事を求めて入り込んだ。

「おーい！アキ！～！メシ食わせててくれ！～！～！～！」

「最初から仕事する気ないでしょ？」

黒髪黒目、垂れ目に垂れ眉の女性、アキ・スカラ－は片眉を吊り上げて微笑んだ。

心なしか、垂れ目に怒気を孕んでいる気もしないではない。

「だつて仕事ねえし」俺はアキの用意したまかないを食べる。

なぜか今週は昼飯に限りアキのおごりになつてている。

「うほつ！綺麗な水じゃないか！これもおごりかい？？！」

上下水道が完備された「車輪の王国」では普通かも知れないがコレは嬉しい。

あつといつまにまかないを食べだす俺。アキの薄給にしては実に豪勢な内容だ。

これも普段の俺の行いの成果であるつ。

「まあ馬鹿みたいに食べて」「成長期だからな！」

睨み付けるアキを無視して俺はメシにありつく。なんせ今週は昼飯だけはまともに食えるのだ。
この至福は変えがたい。

「でも、いいの? ホイホイ食べちゃって」アキは意味ありげに微笑んだ。

ネズミと「キブリ」と浮浪者の子供が走り回る他店舗と違い、

『五竜亭』は厨房はもとより食堂部分も掃除が行き届いている。加えて、木の纖維が腕にちくちくする安物のテーブルはこの店にはない。

さらに、女将のアーリイさんの料理の腕は宫廷料理人並みと評判なのだ。

金持ち連中の残飯を再調理したあまりものまかないといつても侮れない味である。

「そーいえば今日は格別に美味しい!」俺が喜びの声を上げるのを見て、

「そーじゃない」アキは額を押さえてため息をついた。

「……だ。そーです。トートさん」アキはそういうとため息をついた。

「素晴らしい! 素晴らしいよ! スカラーチ君! …」

嫌な予感がした。俺はそっち側を振り向かないように気を配り、即座に店を出ようとした。

が、全てが遅かったのだ。

「人糞、家畜の糞から食材を! 尿や汚水から飲料水を! !
栄養、味、消化のよさ、値段の安さ。全てよし! 我が研究の成果が

実つたのだ！」

俺はテーブルに突つ伏し、ドワーフ達が丁寧に鮫の皮で磨いたテーブルを盛大に汚した。

……。

「『めんなさい』」アキは楽しそうに笑つた。絶対反省していない。ちなみに、トートと書つ中年一歩手前の青年は簾巻きにして放り出した。

男だつたら張り倒している所だが、流石に女のアキは殴れない。

「『燃える水』から作った肉、食べられない海草から作った肉もどき、

馬の小便から作った水、糞だけを食べさせて育てた豚の肉……」確かに力チカチになつて水で溶かした不味いビールを「馬の小便」つて言うが。

「ゲロから作ったシチューもあるわよ?」死ね。

俺がにらみつけるとアキは楽しそうに「冗談よ」と笑つた。

「まだ美味しいんだつて」

俺はため息をつくと、「慈愛の女神様お許しください」と呟いた。

薄暗い店内に気がついた俺は窓を開ける。春先の冷たい風がちよつと辛い。

「ぶつたう。チーアがぶつたう。傷物にされちゃつたうお嫁にいけないう」

店の奥ではたんごぶを抑えたアキがぼやいている。知るか。

森の香りが心地よい。天氣も良い。

ふと視界に入った簾巻きが喋った。「寒いので入れてください」

「コレ、凄いぞ」ロー・アースはそういうと遠慮なくその水を飲んだ。

「精靈使いの浄水の魔法をほぼ再現している」

全ての不純物を取り除いて純水を作る「浄水」と違い、水としての味も優れないとロー・アースは言つ。

……今日からお前、馬の小便飲む男な。俺は悪態をついた。

「このお肉、美味しくないけど、不味くはないよ？」

謎の肉の試食をする幼児の姿をしている妖精は俺の相棒、ファルコ・ミスリル。

燃える水から作ったという肉で作ったステーキはミンチを練つて作つた肉に似ていて、

酷い味というほどではない。むしろ残飯よりよっぽど美味い。

「研究の副産物で出来てしましましたが、将来的には人糞から作れるようにしたいですね！」

そういうて笑うトーートという研究者に、俺は無言で顔面にパンチを入れた。

「他にも色々あるんです！大岩をも碎く炎の魔法を再現する薬とか！高地に住まう蛮族が使う糞から作った高性能な燃料とか、糞から作った作物を元氣にする薬とか、尿から作った食用塩とか、人糞や家畜の糞を水に溶かして日光を当てて育てた藻を処理した豆もどきとか」

……正義神殿の異端審問官に捕まつてしまえ。どう考へても危険人物じゃないかつ！

「そつそつー今一番頑張つてするのが糞尿から砂糖を作る研究なんです！」

「それは流石に」アキがぼやいた。「ドン引きだろ」ローが呆れる。甘味つていうのは滋養剤としても、調味料としてもかなり貴重だが、安価に作れたら凄いだろうなとは思わんでもない。でも原材料が糞尿だといわれたら……。さすがにバスだ。

「…… せとうだいこんとか、メープルシュガーとか、蜂蜜でいいんじゃないの？」

流石のファルコも現実的なツッコミを入れるが。

「高いじゃないですか。うんちならタダなんですよ？」

いや、までまで。なんかおかしいだろ。

参考までにと魔法や実験で使う触媒代金をロー・アースが聞く。ロー・アースは首を振つて手をひらひらさせた。

「綺麗な水と甘コケが必要だつて」甘コケといつのはエルフが好むコケだ。

甘味と旨み、豊富な栄養を持ち、光源としても使え、水源を浄化できる。

当然、魔法の触媒として砂糖など比べ物にならないほど高値で取引されている。……ダメじゃん!!

「と、いうわけで、糞尿がもつともつと必要なんです。お金はいくらでも出します」

キラキラする瞳でトートは俺達を見ている。嫌な予感。俺は逃げ出そうとしたが、即座にトートに腕をまれた。

「や ら な い か

「ウホッ！いい仕事！」そいつて当事者でもない上、店主でもなく、

更に俺が了承してないのに勝手に冒険者紹介手数料を徴収するアキ。

嫌だと叫んで暴れる俺をローとファルコが抑える。

こうして、俺達は便所掃除人として働くこととなつた。
全て貧乏が悪いのだ。たぶん。

「今日みたいに天気が良いと最高なんですが」

トート氏の解説は本当に長い。なんでも糞から食料や肥料、はては砂糖を生産する場合、

太陽の光と綺麗な水、ある程度の気温、ある種の藻（酷いときは甘ゴケ）が必要らしい。

「そのまま食べるとおなかこわしますからねえ」……食つたのか。もうなにも言うまい。

「再現もしてみましたが、天然の味とか触感は出ませんよネエ」俺は吐き気に耐えかねていたが、この男、俺のゲロでも喜んで手にいれようとるので根性で耐えた。

便所掃除といつてもこの国には汲み取り式の便所はないので、個人宅を回つて集められない。

そういうことで車輪の王国地下に広がる王都の上下水道への立ち入り許可を役人に求めたのだが、

毒でも撒かれたら一大事と当然のように断られた。

また、「大量の糞尿を必要とする」と届出に素直に書いたトートは危うく正義神の神殿に発狂者として通報されるところだった。

「車輪の王都はまだ温暖なほうですが、太陽が照つていてポカポカでないと発酵してくれないんです」

それ以前に俺が発狂する。

冬場どころか、太陽が照つている日と言つのは貴重だ。

庶民も貴族も太陽が照つている日というのは仕事はほぼ休みにする

ものである。

そんな日に、何故糞尿取りなぞ行かねばならんのだ。
あんなのは糞壺にためこんで窓から捨てれば終わりだらう。

「肥料つて？？」放浪癖がなければ大神官な筈の兄貴に聞いたこともあるようないような。

「大地の力は作物を続けて育てるとどんどんなくなるつてご存知ですか？森を焼いた後に烟を作ると良く育つともいいますね」
聞いたことがあるが、その焼烟つて奴はエルフを激怒させるので、あまりやられない手法だ。

てくてくと俺達4人はスラムのほうへ歩いていく。

この国で行政で下水道進入許可を得ることが出来ない状態で大量の糞尿を手に入れたければ、魔導帝国時代の遺産である上下水道を使つていらない不法建築が多い地域に行くしかない。

つまり、スラムである。

「大いなる森の力を燃やしてしまつて、わずかな大地の力にしてしまうわけです。

ただし、其の後の酷さは「存知でしうが」トートはため息をつく。

「いくら育ちが良いとはいえ、開墾の手間は半端ではなく、エルフを激怒させる代償に、

ほんのわずかの間しか役に立たない烟を作るのは割に合わないのでないかと。

「ですが、お日様の光とある種の藻を育てた糞尿は、うまい具合に発酵させると、

キラキラする瞳でトートは言つ。

「なんと！大地の力を回復させる薬になるのです！それを肥料といいます！」

「胡散臭い……。うん！」食いつとおなか壊すつて今いつたぞ？

「おなかは壊しますが、藻が発酵と一緒に糞尿の毒素……といつか、病気の元？を消してくれるのです」「んなアホな。

「うーん？？」毒だか病気の元だか知らんが、違いがイマイチ…。俺も兄貴から医者の手ほどきは受けたのだが、どうもトートは魔道士や学者だけではなく、医者としても一流らしい。

「この国、スラムはこまめに焼けつて無茶苦茶なことするけど、関係ある？」

「フルコが口を挟む。伝染病を防ぐためとお上は言つが、誰も信じていない。

「あります！鋭いですね！……スラムでは糞尿を処理せず、窓から捨てますよね！？

その糞尿は雨で流れて終わりじゃないんです！

実は細かくなつて残つているんです！それが回りまわつて飲料水に入つてしまい、

病気の元が身体に入ることで伝染病になると私は考えています！！」

「「「珍説すぎる」」俺達は呆れた。伝染病の原因はいまだわかつていないので。

確かに、この国ではスラム以外から伝染病が発生することもないし、区画整理と言つ名前の破壊活動を行つた年は病気が流行らないこと

は知っているが、

よその国では効果がなく、単に愚策として知られている。トートが言つには「上下水道のない他国では当然の結果」だそうだ。

「雑草と生煮えの食い物は食つな。生活習慣を改善する。水は必ず布で越して沸かせ。

必要以上に湿氣のあるところに住むな。服と身体と部屋は清潔にしろ。

糞壺はこまめに指定の場所に捨てに行け。

それらを愈つて病気になつた。魔法で治せといつ患者がきたら蹴れと冗貴も言つてたが。

「チーアー！！！！！」ロー・アースの叫び声。

「「「めんよー」とあとから声が聽こえてくる。勿論上から。

「水靈よ。我らを護りたまえ」間一髪。

「浄水」の術の応用だが、あらゆる毒や炎から身を護る薄い水の膜を作り出す術だ。

結果的に、俺達4人に降りかかった汚物は綺麗な水に化けた。だがソレが良くない。

「妖精だ」「よそ者共だ」遠くからヒソヒソ声がする。

ボロボロの廃屋の窓は全て締め切られ、近くを通る男達は危ない視線を投げかけ、ポケットの中から手を離さない。

あちこちからクロスボウで狙つてゐる氣配がする。知らないうちに入り込んでいたらしい。彼らは区画整理などを行う役人やよそ者を嫌つてゐる。

「あ～」汚物を当たられそうになつたトートは「残念です」と呟い

た。

「あの、うんちやおしつこを人にぶつけるほどあるのなら譲つて欲しいのですが」「できればたくさん。

ポケットにナイフを潜ませていた男達は石の様に固まっていた。

……。

「変な医者だよなあ。トート先生は、『うつつき風』（とこうか、『うつつきもの』）のじつい人々や田つきの悪い女共が笑う。

俺はトート「先生」の医術活動につき合はれ満身創痍状態だ。図らずしも精霊の使い手で癒し手だとバレてしまつたので、さつきから回復魔法や精霊の加護、

医者の真似事、料理の手伝いとこき使われた。

ファルコはあつさり場になじんでいる。傍田は幼児にしか見えないので当たり前なのが。

ロー・アースは薬の調合の手伝いだ。もともと魔道士、お手の物だ。

「うんこ」なら糞壺にたつぱりあるから、好きに持つていってくれよ！？」

「では、道路にある分も頂いて宜しいですかね？？？」キラキラした目で喜ぶトート先生。

「そりや、金はこらん。ウンコくれつてお医者様、今までいませんでしたから！……」大笑いする住民達。

「では、遠慮なく頂いていきます！……」スコップを手に飛び出さんとするトート先生を俺は止めた。

「あの、仕事には道を覆うウンコの塊というか床といつか……。それの掃除も含まれているんですか？」

「当然です」トート先生はにこやかに微笑まれた。正直、俺は泣きたくなつた。

トート先生はスラムの住民の医療活動に終始せざるを得なくなつていたので、

俺達と住民有志（ウンコを貰つてくれるといつ醉狂ものがいるのだから仕方ない）が必死で道路の床と化してこるウンコを除去する作業を行う。

「おーい！投げるぞ〜〜！」「なげんな〜〜〜〜〜〜あとで集めるのが大変だ〜〜！」

「ふざけるな。下まで降りるのが面倒なんだぞ〜」「投げたら分け前やらねえ！〜〜〜

……たしかに、糞壺を指定の場所に持つていく人間と言つのは何処の国でも稀だが。

「ある種のカビですね。目を洗浄しました。これで見えるようになりますよ」

トート先生はにこやかに微笑む。喜ぶ老人。変態だが、結構エライ人かもしれない。

「やつぱり水ですねえ」とトート先生は言つ。

先ほどの目の病気の原因は水に含まれる見えないカビの所為とのこと。初耳である。

汚い水のある国では病気の元を駆逐できないらしい。

「糞壺の改良が必要です」とトート先生。はあ。と俺は呟いた。
適当に出すだけだしたら窓に捨てるだけのものをどう改良しようと？

まあ、車輪の王国では古代の下水道を利用できるので、糞壺のない

家庭も珍しくはない。

行政の指導どおり建築して便器に糞尿を排泄し、水周りで利用した生活排水を下水に接続する。

そうすれば汚物は勝手に古代の下水道が処理してくれる仕組みである。

この関係で汚物を収集するためにワザワザスラムにに向かうことになった。

この下水と上水完全分離システムは慣れるとよその国にいけなくななる。

「そーですね」トート先生はにっこり笑つた。

「チーアさん……」「はい？」

「脱いでください」はい？？？
な、なんだ？？？それ？いきなり脱がせようと襲つてきた男とか女
は限りなくいたが？？！

ハアハアと興奮した息遣いがトートから漏れる。

「そして私の前で排泄してください。できれば大小」その頬は紅潮
し、瞳は潤んでいる。

「先生」俺は微笑んだ。

「どうして頬を叩くのですか」トートは涙を流して不満の顔をする。

……。

「なんかあつたの～？」「ふああ。どうした？」ファルコとロー
と住民達が戻つてくる。

「別に何も変なことは言つていません。排泄してくれと言つただけ
でして」「「「……」」

住民や温厚なファルコはもとより、流石のロー・アースもドン引き

している。

「男性なら他人、可能なら美形の異性、女性的な容貌の少年の排泄を見るのは興奮するでしょう？」

「しません」「しない」「するとしても流石にそれは公言すべきでは」

本当に、本当に正義神殿の異端審問官が狩りにくるぞ？？？？

ふう。とトートはため息をついた。

「つまり、生物にとって欠く事のない嘗みである排泄は、実際に軽く見られているか、汚いもので、ないものであつてほしいと思われているのです」

慈愛神殿では自衛以外の暴力は禁止されているが、流石に排泄を異性に強要するのはどうだろ？

まあ、トート先生は俺の性別に気がついていないと思うが……。ちなみに、他国でのうちの神殿は汚物の掃除や残飯の回収も引き受けている。

しかし、寒冷な土地では「肥料」とやらは作れないと思われる。

「かくなるつえは古代の排便そのものを楽しんだといつ文化を復活させるしかありません！」

それも早急に！世界に広めなければ世界は滅びてしまうでしょう！

「…………」「…………」「…………」「…………」「…………」

変人だが、真面目で気さくな性格と確かな医療技術、しかも金を不要とする態度。

一週間足らずでスラムの住民の心を掴んだトート先生だが、流石にドン引きである。

「なんといふ糞の理想」と、ローアース。

「なぜそこで世界滅亡なんですか……」スラムの住民達もドン引きしている。

世界制服だの滅亡だのは古代魔導帝国が滅びた今は頭のおかしくなつた魔道士くらいしか口にしない妄想だ。

「ヒーとのおっちゃん。世界が滅びるって?」 ファルコがいつもの調子を取り戻す。

単純に、ドン引きしそぎて思考能力が低下しているだけかも。俺もそうだし。

チーアさん。皆さん。いらっしゃり。そういうてトートは俺達を自室となつた廃屋に案内する。

(住民が診療所として急遽建設してくれた廃屋なので比較的新しい)強烈な糞尿を煮たり焼いたり溶かしたりする匂いに頭がおかしくなりそうだが、必要なことらしい。

「見てください」俺達は小さな壺に魅入る。

「ガラスだ」ガラスはドワーフが作る宝石の一種で、壊れやすいが硬くて腐食にも強く、任意の形を取らせることができる。

「先生、ガラスなんてよそ者がもつてたら盗つちやいますよ?」盗賊風の住人が苦笑する。

「ガラスなんて大した品ではありません。所詮砂ですから」はい?

「砂?砂?」「ガラスが砂?」「所詮砂?」

「結構簡単に作れますよ?」先生は苦笑するが全員呆然としている。この先生、ドワーフの秘法をなんだと思っているんだ? ? ? !

「でも、本質はそこではないのです」先生はこじやかに話す。

「皆さん。IJのガラスの壺の中には命の循環と世界平和への結論があるのです」

「え？ と、正義神殿に連絡したほうがいいのかな……」

……。

「質問です。このカラスの壺の中のお魚さんは何を食べているのでしょうか？」

「Hサ」俺達は即答した。

「IJのお魚さんはフナの一種なんです」トート先生はこじやかに笑う。

「10日以上、私はお魚さんにHサをあげていません。何をお魚さんは食べていると思いますか？」

「フナってなんか食つのだろ？ 釣りのHサには絶対からないのは知っているが。」

「フナはなにも食わなくとも生きていけるんじゃないでしょうか？」老人が問う。

「違います。毎日この器を洗えばたちまち弱っていきます」

「水飲んでいるのか？」「水だけでは生きていけませんね」頭を抱えてあーだーだ議論する俺達に「正解は藻です」とトート先生は言つ。

「お魚さんのうんちと太陽の光と水で藻が育ち、それを食べてお魚さんが生きているのです」

「マジか？ ？ ？ ！ ！ ！ とこいつが、フナが食べ物を食べるって初耳だー！」

「ウソだと疑うならパンくずを上げてください。食べますよ？」

そういうて、トート先生はパンくずを壺に投げた。フナはパクッと

それを食べた。

「藻に良く似ているので間違えて食べるようですが。ちなみに練り固めれば釣り餌になります」

「…………」

釣り人たちが必死で探し求めていた「幻のエサ」がパン??…!!

「ちょ……ちょと俺、釣りに行つて来るわ」「あ、あんた、いつぱい捕つてくれ」

「お、おうーーー頑張つてくるーーー」「お、俺も釣りに行つていですかトート先生！？？」

「お話の途中ですが俺も」「私も」

誰も逃げませんからちょと待つてください」とトート先生は笑つて返す。

「豚さんをうんちだけで食べさせることができるよつこ、フナはいつたんうんちを入れて藻を育てた池で元気に育てて、こつやつて光のはいる壺に入れれば」

飼つことが可能です。とトート先生は言つ。

「…………」そもそもフナを飼つうという発想がなかつた。

「それって、大きく育ちます??」「今は研究だけですが、頑張れば家畜になるのではないでしょつか?」

「うおおおおおおおおおー」「偉大だ!」「偉人だ!…」「すげーぜ!先生!…!」

凄すぎるぞこの先生。家中ウンコまみれなのはさておき。

「これは人糞についた藻を水とお日様の光で育てて食料に加工したものですが」

トート先生はにこやかに言つ。

「これだけで1年以上人間は生き延びれますー」 ちやんと食べて実験しました。ヒートー先生。

「……」緑の豆つぼい食い物は俺達だけではなくスラムの皆も喜んで食べていた。

「先生…そういうのは早く言つて下さる」

「……いや、その、ウンコで薬を作れるつて言つぱんで座ることも思いましたが」

「酒のシマミに結構いけると呑んで食つちまつたよ……」

「いいことではないですか。嫌がる豚さんを食べなくともいいんですよ？」

ちなみに豚は人になつぐ。賢くて絞めるのが悲しいくらいだ。

「その豚さんつて」「ウンコで育てました」「先生……」

「いいですか？森を焼くと10年も持たない畑が出来る代わりに、100年単位でエルフの怒りを買い、森の再生も同じくらいの時を必要とします。

しかし、肥料を使えば、一年間に一回同じ畑を使えるのです

ウソだろ？！？！

「休耕地にお花の一種を植えて豚さんを飼えば更に食料生産の効率を上げれます」

流石にそれは大嘘では？？

「いえ、理論上年に2回以上育ちますよ？」「マジですか…」

「実験しましたから。もつとも素人の私では別の理由で枯らしてしまいましたけど」

「皆さんは戦乱や飢餓、水不足、水を飲んでおなかを壊すなどの理由で

「身體を亡くされたことはないのですか」

「「あるにきまつてんだろ」」そんな人間はこの世にはいない。全員口をそろえた。

「「Jの藻が育てばそれがなくなる世界になります」」
俺達は絶句した。なんという偉大な男だ。この男は。

そうやつて見とれていると彼はいきなり、衆人環視の中、ズボンを脱ぎだした。

「ああ。ショーンベンです」そういうコップみたいな器具に小便を注ぐ。

器具から出でてきた水をカップに入れて、飲む。

「綺麗で、飲める水になりました」……マジで？？

ロー・アースが「飲まなければ良かつた」と苦笑いしている。 いまさら何を。

見てみると確かに水の精霊の力を感じる。 本当かよ。

「すげえ！俺らの飲んでる水より綺麗だぞ？」 「上水道の水を汲みに行かないところはのめないぞ！？」

皆が大喜びしている。 試しに普段飲んでいる水をこのカップに突っ込むと貴族が飲むような綺麗な水に化けた！

「J」これって工房の汚染水や鉱毒にも効果がありますか？？
よくわからんが、鉱山を下手に掘ると呪いが大地に降りかかるといわれている。

一部では毒の一種といわれ、「鉱毒」といわれている。

「まだ実験中ですがいざれは」

「すげえ！！魔法だ！」 「魔法ではありません！英知の力です！！」

そして、英知、勉強は誰にでも出来るのです！！と、トート先生。

「トート先生！俺も勉強が出来るんですか？文字だつて読めませんが

體體也。——丁先生が詣び

一食料がないから戦争をする。戦争がなくなれば傭兵が野党としてあぶれる。

野党は食料を生産しませんので農村を壊す 農村が滅びれば余計食料がなくなるのです

タスヒム

「ですから、野党の皆さんが野党を辞めたくなるほど」ほんがあれ
ばよいのです」

兵士や冒険者を雇う事は平和的でしょ。」などトニー先生

「そのためには、ひとつひとつといふんちの研究を極めねばなりません」

トト先生は微笑む

「行政の許可が下りないなら、下水道にはこうとうんちを盗みま
しょう」

「世界の平和のために、戦いましょう！」

○

まさか、下水道に侵入することになるとは。

俺達は鼻をしかめた。一応、側面には歩くための歩道があるが、國家の宝である上下水道に勝手に入り込むことは大罪である。加えて、古代の魔導帝国の遺跡である下水道や上水道には、いつたいどんな魔物や罠が待っているかワカラん。

道中、よくわからないアメーバーもどき、不思議な虫みたいな生き物に襲われたが、

トート先生曰く（ついてきた！）「水を綺麗にしてくれる生物」らしい。

「しかし、なんでこんな遺跡に」俺らは愚痴る。

厳重に封印されているはずなのに下水道に住み着いた浮浪者達に遭遇するが、

トート先生が食料をホイホイ与えるので逆に待ち伏せされて襲われ、眠りの魔法を使う羽目になつたり意外と大変だ。

「あの人たちつて太陽みたことないのかなあ」 ファルコが呟く。
……どうなんだろうな。

といひでなんで下水道にワニがいるのか、そつちのまつに専念して欲しい。

ちなみに、ワニについては熱帯に住まう凶悪な獣だ。

下水の中から待ち伏せ、いきなり人間をさらつて食つてしまつたが、

待ち伏せに気がついたので撃退は比較的容易だつた。

「年間通して暖かいので熱帯の生き物も生き残りやすいのでしちょうね」

トート先生はたのしそうに解説している。道楽者が取り寄せて捨てたのが育つたのだろうとの事。

その道楽者は刑罰を受けるべきだ。うん。

「つたけを盗むなら別段奥を用意する必要はないのでは？」俺はぼやく。

一張羅が台無しである。帰つたら浄水の魔法が必要だ。

ロー・アースはいやそつと肩を落として歩いている。いや、彼でなくとも俺だつて嫌だ。

「探検 探検」ぼくのまへ 場違いな明るい声が反響する。ファル口である。

彼の嗅覚は犬並みの筈だが「気にしないようにしたらだいじよぶー」だそうだ。

どういう神経だと問いただす。「ネズミさんだつて臭いって思つてないー」と返つてきた。

それは。トート先生は解説する。「うんちを処理する魔法の機械か何かがあるはずなんです」

原理を解説すれば、他国でも上ト下水道がつかえます。と楽しそうに言つ。

……原理を解説するビビリか、うつかり壊して縛り首になりそうな予感がする。

「霧雨？」^{キリサメ}「かもしだせんねーーー！」

魔剣、キリサメは刀身に霧のよつな結露を常に宿し、常に水を生成するのみならず、

刀身に触れた毒素や邪氣や汚物を完全に綺麗な水にしてしまう力を持つ伝説の剣である。

あまりにも素晴らしい力を持つため、魔導帝国時代に同じような力を持つ「ペー品が大量に作られたとある。

「いや、今の魔法でキリサメの再現は「ペーでも無理だつ」ロー・アースは言つ。

それじゃ、最低でも「ペーの剣がないなら下水道の実現は不可能じやないか。

トート先生曰く、「海や川の精靈さんもある程度は浄化してくれま

すが、大都市の汚物は無理です」らしい。

俺達慈愛の女神の使途が回復魔法を使いすぎると倒れるのと同じらしい。

「ねね。かなりおくれてきたよ！」ファルコが言つ。
正直迷路と変わらない。戻つてこれるか極めて疑問だが、
「アリアドネの糸玉」という魔法の糸玉をトート先生が持つていた。
これを使うと即座に入り口に帰還できるらしい。貴重な品だが使い捨てる。

「うん……？」「どうした？」ロー・アースが不思議そうに問つ。
「今、物陰にグラスランナーがいたよつた」浮浪者の子供にも見えなかつたし。

「…………ファルコ！チーアー！先生！！逃げろ！！」
突如走り出したロー・アースを追つて俺達も走る。が。

「な、なんだこれは……！」俺の身体にまとわりつく粘つく糸。
「ぐるぐるぐるぐるぐるまきまき～」
「クソツッ！遅かった！」
「巨大蜘蛛でしょうか？楽しいですね」楽しくない……食われるんだぞ？！

完全に動きを捉えられ、水溜りならぬ糞溜まりの中でもがく俺らを小さな黒い影が取り囲んでいた。

……。

俺達を捕らえた小人達はグラスランナーに似ているが、
黒い肌に邪悪な笑み、触手を思わせる異常に長い指を持つ生き物だつた。

「古代魔導帝国の言語だ」 マジか。この小人共、何百年生きているんだ？

「下水道の最深部の整備は彼らの仕事らしいぜ？」 楽しそうに言ふハーロー・アース。

なんか問題あるのか？

「ねえねえ。僕ら悪気はないんだよ？」
ファルコが弁明するが、聖地を汚したと怒る黒い小人達は聞く耳を持たない。

冒険者である以上、まともに死ねるとは思わなかつたが、まさか下水道で糞にまみれてスープになつて終わるとは思わなかつた。

俺達の所持品を漁る小人達、俺の食材や調味料、魔法の薬品の類などは全て没収である。

「なんの話だよ?」「トート先生の藻で作った飯が美味いってさ」そりやそりや結構なことで。

「砂糖や塩も沢山持つてて、嬉しいってや。……おい。その砂糖は。

「……」「……」「(<>)(<>)」……

??

開放された俺達は、無事、地上に戻ることが出来た。

砂糖や塩を糞尿から精製する技術を得た小人達は態度を一変。上機嫌で古代の浄水設備の解説をしてくれた。

帰りに握手を求められたが、正直どうよ?これって……??

「さて、頑張つて作りますよ! ! ! 」トート先生は使命に燃えているのでどうじよつもない。

数週間後、「自信の糞壺」がスラムに出来た。

誰でも使えるように工夫をした結果、スラムのみんなに使ってもらえるよう無料で公開された。

俺はトート先生にはわからない「ある機能」の追加を提案した。元になつた古代遺跡の便所にはあつた機能である。古代人の知恵は偉だ。

「ええと」トート先生は楽しそうに言つ。

「おしつこやうんちを飛ばして的を狙うとか、絵を描くとか、排泄の速度を競うとかいうゲームは今回発見できませんでした」

残念ですとトート先生は言つたが、そんなもの再現できるはずはない。既にトート先生の性格を知つていてるスラムの皆は大笑いしている。

「でも、糞壺を窓から捨てる手間に変わるくらい、楽しい糞壺は作れました」

将来的には携帯可能を目指します!とトート先生は意気込む。

よーわからんが、綺麗にした「水」を噴水の原理でもつて噴射、尻を洗うのみならず、掃除を勝手にやってくれ、ついでに下水に流してくれる画期的な代物らしい。

……使用法を解説してもらい、「便座」と書いた椅子に座る。

壺と違つて、中腰にならなくて良い。楽だ。俺はズボンを脱げりと
して。

下からのぞくトート先生の顔に気がつき、踏んだ。

ちゃんと下水に流せるか試験するためと解説されたが、やっぱり、
変態だった。

……。

なんというか、その…………快適というか、スッキリと書
か、身が清められたというか……。

古代人の知恵に感動しつつ、俺は個室から出た。

隙間から覗こうとした男女はローの眠りの魔法で退治されていた。
グッジョブだ。ロー・アース。

次々と男女が試しにはいってみては出て行くが、中には気持ちよ
ぎて出てこない困り者も続出した。

特に女性の評判は物凄くよかつた。男にはわからない世界であろう。

「私の仮説が正しければ、これが普及すれば伝染病は激減します！」

「！」

「おおおおおおおおおおおおおおおお……」「凄い！凄いぞ！先
生！――！」

「でも、道路に糞壺を投げていたら元通りですから、それだけ気を
つけてくださいね！」

「「「面倒くせえ――」」

大笑いする住民達。にこやかに微笑むトート先生。

「皆さん。ロー・アースさん、チーアさん。ファルコさん。助けてくれて本当に有難うござります。

……これで、伝染病や食糧難や食中毒で死んだ方々も浮かばれると思われます。

私はもひとつと研究して、もひとつと効率よく、沢山つんちを食料に出来る社会を目指します。

そうすれば、世界中が都市になつても元気に生きていけるはずです。壮大すぎる理想だが、彼ならやり遂げるかもしね。世が世なら大天才といわれただろう。

「「本当に、本当に有難うござります」」トート先生は頭を下げた。このまま、スラムでウンコの研究をしながら暮らすそうだ。

「前より臭くなつちましたが、トート先生ならしかたないわな！」

盗賊風のアンちゃんが笑う。

「あの豆、品切れらしいから、沢山作れるよつてもらわないとな！」……氣に入ったのか。『愁傷様。

「願いを叶えてくれる冒険者。スカラーリ君の言つことは本当にしたね」トートが笑う。

……ほうほう。そういうふざけた噂を流しているのはアキだつたか。あとでまかないに例の縁の豆を入れておこう。

「ありがとうございます。最後に、皆さんのお名前をもう一度教えてくれませんか」

「「「ただの、『夢を追う者たち』です」」俺達三名は名乗った。

「「「近寄るだけで疫病神が憑くといつ噂の……」」」「」「」「

「「余計なこと言つなつ！」

スラム街の皆さん俺達は笑いながら叫び返した。大笑い。

「じゃ、俺達はこれで」俺は笑つて手を振る。ローが背をむけてひ

「またね～～～！」 ファルゴが楽しそうに踊つて手を振り続ける。

口笛を吹いて呼び出した愛馬、シンバットは俺達を見ると嫌そうに首を振った。

エピローグ。

数週間後、お上に呼び出された俺たちは豪華な部屋の中についた。ものすつゞく、ものすつゞく居心地がわるい。

からさまに顔をしかめている。

おかげで、武器や防具の補修代金が大幅に軽減された。助かつた。

ふと、俺達の隣に気さくそうな爺さんが座った。

「どうもファル！」の知り合いらしい。

ネなんだろうか。

……なんのギヤグをやつているんだろうか？

「あれは凄いね」 「おといれ？」 「そうそう。妻も娘も感激してたぞ」「おー！」

貴族様も似たものを作つて実用化していくそつだが、暇な話である。

他国なら糞壺から窓に放り出せば終わりの話を、

噴水の技術を応用し尻を洗つた上でその水の流れを利用して糞壺表

面を洗浄、

その水の力で古代の下水処理施設にそのまま廃棄して、廃棄の手間を省けるとい、

画期的な糞壺の再現は、ちょっとした名物になり、早くもあちこちで普及はじめているそうだ。

豚と肥料育て（太陽の光が足りないので光の魔法で代用できないか試験中）、

伝染病との関連性についての仮説も検証されているが、皆本気にしているまい。

成果が出、実用にいたるまでは相当な時間がかかるだろ。

君がチーア君かね。と老人は笑う。「そーだぞ。爺さん」俺は言葉を返す。

「ドライアド君に似ているな」……母さんの知り合い？？？ふふふ。と老人は笑つて席を立つた。「また会おう」まつたね～！と手を振るファルコをみながら、変な爺さんに絡まれたなあと思つ俺だった。

役人どもに呼び出され、無理やり膝をついて話を聞かされる俺達。ファルコにいたつては正座して聞いている。

「技師トート、及び『夢を追う者達』に称号を授ける」

「辞退します」俺達三人はあつさりと答えた。

トートは喜んで受けたよつだ。頑張つて欲しい。

「他国なら糞壺から窓に放り出せば終わりと思われていた。壺を噴水の技術を応用し……洗つた上でその水の流れを利用して……壺表面を洗浄、

その水の力で古代の処理施設にそのまま廃棄して、廃棄の手間を省

く。

偉大な魔導帝国の遺産の再現に貢献し、都市の衛生面大幅に向か、
伝染病の予防、浄水技術、食料増産に貢献した功績を認め、
技師トート、及び『夢を追う者達』に称号を授ける

「だから辞退します！！！」俺達三人は必死で叫んだ。

「いらんのか？謙虚だな？」にっこり笑う「国王陛下」はあの楽しそうな笑みを浮かべていた。

そして、俺達はしばらくの間『糞を追う者たち』のあだ名で呼ばれることになった。最悪である。

もし、郊外の森の中の小さな冒険者の店を訪れる事があつたら、
迷うことなく俺達を指名して欲しい。きっと、願いは叶うから。

ただし、『余計なオマケ』については自己責任で！

(エンド)

（後書き）

「宇宙船サジタリウス」のように一般的な冒険者が庶民とともに困難に接して、

仮面ライダーブラックの初期路線のように敵味方が握手して和解して終了する。

冒険の題材は全てファンタジー世界の日常生活に基づく。

……はい。基本ラインからは語るのを避けることが出来ないウンコの話です。

他にも浄水関係のお仕事をしている親友から興味深い話をいくつも聞いているのですが、

この世界の人間の知識にそぐわないのでパスしました。

なお、トート先生のモデルは特に存在しませんが、名前はTototo

社様から取らせていただきました。Tototo社様御免なさい。

もしかしたら加筆するかもしれません、とりあえずここまでとします。

……内容が酷すぎて削除されそうな異色作品になりましたが、作者は大真面目に書いています。

この拙い物語を排泄を通して人類の食料危機回避に尽力された偉大なるわが国の研究者、故中村浩博士様に捧げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0255ba/>

糞のような理想のために。

2011年12月31日16時51分発行